

口語詩句賞選考 総評

口語詩句賞という賞のあり方も関係しているかもしれないが、応募作品において、所謂俳句や短歌といった定型感の強い作品の割合が少ないような印象を受けた。短歌や俳句には、それぞれ既に俳壇や歌壇とつながりの深い賞が数多く存在することも関係するかもしれない。ただ新たな表現を切り開くという点では、定型というこれまでの枠にとらわれない作品が多く応募されたことは、とてもいいことだと思う。そうゆう意味では、奨励賞や新人賞に選ばれた作品は、私が推さなかった人も含め、それぞれが魅力的な作品を提出していたように思う。

最終の新人賞の選考であるが、春町美月（大阪府）とうすしか（東京都）の二人となった。私は、奨励賞のなかでは、コントロールできない亀裂や喪失のようなものを作品に投影しようとしている、うすしかや、ベロニカ（神奈川県）の作風に惹かれていたのとうすしかを推したが、最終的に春町美月が新人賞を受賞した。勿論、春町美月の作品が魅力的でないという訳ではない。よく考えられた文体と、静謐でやわらかな世界を短詩という方法で表現する表現力には確かなものを感じた。

題のある短詩で表現を行う作家としては、まどみちおや八木重吉などが有名であるが、題を付けない短詩を書く作家についてはそれほど多く知らない。俳句では自由律という方法において一度は俳句が詩に近づいたこともあったが、詩のように書かれたものをひとつの作品にするという、作品化の方向には向かわなかった。これらのことを思えば、ここに提出された短詩の数々は、ノーベル文学賞を受賞した詩人であるトーマス・ランストロンメルがとった、西洋の詩を東洋の方法において相対化した方法に近く、これまでの定型にはない表現の可能性を強く感じさせるものといえるだろう。

この賞が言葉の表現における新たなページを開くことを望んで止まない。

西躰 かずよし